後輩に先輩と呼ばれたくて

暁野空

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カルデアに呼ばれて来たのに入れないとかいうバグにあった冬歌くん（というか私）のカルデアに入るまでの物語です

実際、なんで入れないの!?（ケータイスペックが足りないだけ）

というわけで私がＦＧＯを始めれるまで書いてくつもり！

優しい人が優良端末をくれてもいいのよ（／ω・＼）チラチラ

目　次

カルデアの門前で ―――― 1

カルデアの門前で

みなさん、カルデアってところを知っていますか？
そうです、魔術適正のある人間を集めてる機関です。みなさんの中にもカルデアに呼ばれてマスターとなって働いてる方も少なくは無いでしょう。
ええ、実際自分も誘われたからわざわざ極東から来ましたよ。
「可愛い子がいるよ」と誘われてその写真を見た瞬間どこぞの１２の試練を乗り越えたバーサーカーのように叫びながら了承しましたよ！なのに！なのに!?
『なんで入れないんだよー!?』
今、オレはカルデアの門の前で警備の人からの「どうしたものか……」と言いたげな視線を受けながら文句を言っています……。
「ねぇ、なんで入れないの!?」
「いや、私たちに聞かれても……てかキミ名前は？」
「そんなこと今はどうでもいいでしょ!!」
「いや良くないから！もしリストにキミの名前がないならキミただの不審者だから！」
まったく、そっちの不手際でこの寒い中外にいるオレを不審者扱いとは……
「チッ」
「キミ今舌打ちしなかった!?ねぇしなかった!?いや絶対したよね!!」
オレの舌打ちにすごい勢いでつっ込んでくる警備員に仕方ないから名前を教えてやることにした。
「はぁ……仕方ないですねぇ、倉敷冬歌（くらしき　とうか）です。ちゃんとリストにもあるでしょ？」
「倉敷冬歌さんですね、ちょっと待ってくださいね……え？今トウカって言いました？もしかして女の…」
「普通に男ですけどなにか？」
「え？その身長で？その名前で？」
うるさいなぁ……これでもわりと気にしてるのに。てか警備員

さんガマンしてるっぽいけど完全に笑ってるよね？
「で？あったの、オレの名前」
「あっ少し待ってくださいね……
　えっと……あっ、あった。はい、確かにありますね…なら何でしょう？」
「いや聞いているのはオレだから……」
「もしかしてマスター適正が無いとか？」
「そんなことあるんですか？てか、誘ってくれた職員さんはやる気と根気があればできるって」
　そういえば職員の人がオレを誘ったあと色々説明してたような……まぁ関係ないか。
　それにしてもこれだけ大きな機関なのに入り口で不具合が起きるとかどうなってんだか…早くあの可愛い子に会いたいな。
　そう言えば警備員さんの名前聞いてないな……
「ねぇ？警備員さんってなんて名前なの？」
「え？突然ですね、普通名前とか最初聞くもんじゃないですか？」
「いやそんなことといいから」
「よくはないよ……はぁ、菊地千代（きくち　ちよ）です。とりあえず上の人に聞いてみるから警備員の休憩所行こっか」
　警備員さんあらため千代さんはオレを案内するように歩き出した。
　オレはいつになったらカルデアに入れるんだろうか……